ひ、鬢撫でつけ、前に立ち、後に廻りて言ふやう、「烏帽子著給ひたれば、初めて姥が親の許へ婿入し給ふやうに覺えて侍るぞや、なう〳〵、良い殿や〳〵」ほくせうは教への儘に二粒の藥を服して、道すがら腹筋張り引きつりて神鳴の如く鳴りけるを、念じつゝ、臀所を据えて急ぐ。鬼姥から急立てられたほくせうの藤太が、あらんかぎりの衣裳を着飾つて、例の怪しげな藥を飲むが早いか飛び出していつた焦燥ぶりは、如何にも醜體である。彼に如何なる福の神も、味方しそうにも思へない。富と貧乏との別々な烙印を捺された宿命的な二人が、唯欲の一方から宿命を踏みにじつて金持にならうと焦る姿は、戰國亂離の世なればこそ、見る事の出來る荒んだ人の氣持であつた。

夏やすみ後

夏やすみが殘して行つて呉れた雜草が園一ぱいに蔓つて居る。お山の上にも、砂場のまはりにも、花壇の後ろにも、人跡まれなる大原野の眺め茫々と茂つて居る。おひしば、めひしば、あれちのぎく、おおばこ、とぼしがら、のびゑ、かたばみ、むらさきかたばみ、其の間をこうろぎが飛ぶ、ばつたが飛ぶ、こゝ暫くは雜草主義遊園の理想の時。

煉瓦敷の遊園にも、アスファルト敷の遊園にも、季は此の雜草を憲まうとして居る。併し上から重たく抑へつけられ、すきまもなく敷きつめられて居ては、草は下で泣いて居るに相違ない。一と夏乾燥した日光にから〳〵に粗らされて、ほこりつぽく、がさついて居る人工遊園に、此の純自然の深いおもしろ味は得られない。なにがしの茶の宗匠が設計にかゝるといふ。庭師を入れて何百圓かゝつたといふ。珍葉奇石、山のたゞずまい、泉水の眺め、ハハア結構ですと茶の十德なんかゞ賞鑑する樣な御庭に、此の雜草がはえたらどうであらう。殿樣の御聲がゝりで一本あつてもならぬ。刈れ々々一日も早く刈つて仕舞へといふことになるだらう。その刈つたあとは何とする。竹垣などうちめぐらして、いとみやびやかに、風情おかしく打ち磔てられたる立札には、墨のあと美しくも、子供禁制とかゝれたる。

兎に角くに子供は大喜びである。半ズボンの膝を沒する雜草の間を馳け廻つて、きやつきやつと云つてばつたを追ふて居る。みづひきの赤いのをしごいて來て、小さな紙きれに包んだり、あをぎりの實をむしつて葉に盛つたり、おまゝごとの御馳走はいくらでもある。お庭でも、公園でも、幼稚園でも、草は見るもの、花は眺めるもの、その見て眺めて而して觸るべからずときまつて居る草が、こゝでは遠慮なくふんだんにむしつてよいのである。草と一しよになつて遊んでよいのである。當分は別に玩具も何もいらない。此の雜草こそ、自由自在の玩具である。恩物である。

可愛そうな都會の子供達は、此の雜草を特別の賜物のように喜んで居る。自分達の生活に必然の世界としていくらも自然が與へて居て呉れる野も知らず、山も知らず、そこで遊んだ先祖達の幸福も知らず、たま〳〵の夏やすみを利用して、自然が辛じて與へて呉れた此の雜草に、渴けるものが水を得た樣に喜んで居る。そして年に一度づゝの此の雜草に、眞に面白い遊園の樂しさを享けて居る。

年にたつた一度でも、此の雜草のある幼稚園は幸な幼稚園である。一日でも多く此の雜草を刈らずに置いて下さる先生は感謝すべき先生である。

――「幼稚園雜草」より――